言心先生の中国便り

犬とイナゴ

今年の一月十五日、中国大陸からの旅行客が、香港の電車の中で、自分の子供にカップラーメンを食べさせていたところ、一人の香港男性が、この行為を非難した。その時、電車の中の香港人と大陸人が、大声で喧嘩した。直ちに、この映像はネットで公表された。数日後、北京大学の孔慶東教授は、テレビの取材で、香港人と香港文化を激しく批判した。彼は、香港人が植民地時代、英国人に鞭で打たれ、犬のように服従したが、今は、祖国の人に対して、鼻が高く、非常に無礼だと言い切った。

この言論を聞いて、香港で大きな物議になった。ある団体は、香港の新聞で、香港人に対する軽蔑に反発する広告を載せた。広告に、一匹の大きなイナゴの絵と「香港人も我慢できない」と言う表現である。また、香港の作曲家は、大陸の人を皮肉する「イナゴ歌」も作ってきた。

当然、大陸と香港の意識衝突は、今回の電車喧嘩によって、偶然に発生したことではなく、長い間溜まったお互いの不信、不平、不満の総爆発とも言える。

前世紀の97年、香港は、英国から、中国に返還された。今まで、「一国両制度」の構造の中、政治的、経済的な大きな混乱はなかった。しかし、文化的な意見分岐は、時間をかけても、なかなか縮まない、逆に、双方に深く理解したら、対立がもっと激しくなるかもしれない。

近年、大陸の裕福な人は、香港に観光と買物にやって来る。香港の経済に、プラスの面があるが、一方、その中の資質の低い人は、香港の人に多大な迷惑になっている。例えば、香港のルールを守れず、大声で喋り、衛生の面でも悪く、公の場で小便する等のことをする。

数年前、香港の法律で、大陸の出身者が、香港の病院での出産を許可され、生まれた子供は、香港の身分書をもらえることになった。予想以上に、沢山の大陸妊婦が、香港の病院で出産し、香港の住民から有限な医療資源を奪う。当然、香港の人が、イナゴの連想をするのも無理はない。

長く英国植民地であったお陰で、香港の人の物事の考え方は、とても繊細で、日本人とよく似ている。反対に、中国大陸の人は、大雑把な性格で、自分の言動に対する、他人の受け方を全然気にしない。勿論、数千年の中華文化には、良い面が山ほど存在している。改革、開放前の数十年、大陸の閉鎖のせいと、この三十年の「金銭第一」の風潮の影響で、道徳の優良部分は、喪失され、低劣の部分は、沈積された。これは、中国大陸の人が、最も反省すべきことである。